

例会『空飛ぶ馬』レジュメ

○最初に

・日常の謎というジャンル

日常に潜む謎、そしてそれが解明される過程を扱った作品のことを指す。多くは本格推理小説に分類される。著名な作品に、北村薫の「円紫さんシリーズ」、加納朋子の「駒子シリーズ」など。北村薫がデビュー作である連作短編集『空飛ぶ馬』（1989年・東京創元社刊）において殺人がテーマではないものを仕上げ、その後若竹七海、澤木喬、加納朋子など日常での不可解な出来事を扱う作家が現れ、いつしか「日常の謎」派という呼称が読者の口に乗るようになったとされる。『空飛ぶ馬』発表当時は、いわゆる新本格ムーブメントの最中であり、この作品によって、「殺人事件の解決だけが推理小説ではない」との認識が広まった。しかしこれ以前にも、日常の謎的なミステリがなかったわけではなく、その定義の曖昧さも相まって、この分野における元祖は（推理小説そのものと同様に）はっきりとはわかっていない。（Wikipedia より抜粋）

・著者紹介

早稲田大学在学中はワセダミステリクラブに所属。卒業後、母校である埼玉県立春日部高等学校の国語教師をしながら（1980年 - 1993年）、創元推理文庫の「日本探偵小説全集」を編集。1989年、覆面作家として東京創元社「鮎川哲也と十三の謎」の1冊『空飛ぶ馬』でデビュー。1991年に『夜の蟬』で第44回日本推理作家協会賞（連作短篇集賞）を、2006年に『ニッポン硬貨の謎』で第6回本格ミステリ大賞（評論・研究部門）・2006年版バカミス大賞を受賞する。代表作『スキップ』等で、直木賞最終候補作に6度選ばれている。また、本格ミステリ作家クラブ設立時の発起人の一人であり、初代事務局長を務める。2005年、同クラブの会長に就任する。また同年より翌2006年度まで、早稲田大学文学学術院客員教授として教壇に上る。2009年、『鷲と雪』で第141回直木賞を受賞する。2013年度より再度早稲田大学にて文学学術院文化構想学部教授に着任。（Wikipedia より抜粋）

・円紫師匠と私シリーズについて

シリーズの基本的な型は大学生の「私」が持ちかける謎を噺家・春桜亭円紫が解いていくというもの。円紫師匠は典型的な安楽椅子探偵。作中に様々な時代、国の文学作品が出てくるのでブックガイドとしても使えるかも？解説にもありますが北村薫は当初覆面作家としてデビューしていた為、主人公の「私」と同様著者も女子大生ではないかとの憶測が飛んだそうです。

○『空飛ぶ馬』作品紹介

織部の霊——この高揚と弛緩、つまり眠い、からすべてが出発したのだ——

- ・微睡みに引き込まれる
- ・こんちくしょうゆ
- ・絵画が切腹？

砂糖合戦——あまいはからい、からいはあまい——

- ・「砂糖合戦」の意味
- ・垣間見てしまった恐怖
- ・ネガポジ反転

胡桃の中の鳥——物凄く大きな洗濯機だね——

- ・正ちゃん
- ・雲海を見下ろして
- ・「胡桃の中の鳥」の行方

赤頭巾——神様、私は今日も本を読むことが出来ました——

- ・赤頭巾（赤いレインコート）
- ・一番ありふれた不幸せ
- ・二人を繋ぐものは？

空飛ぶ馬——どうです、人間というものも捨てたものじゃないでしょう——

- ・トコちゃん
- ・人間（男と女のつながり）への不信感の払拭
- ・最後の一行

○終わりに

- ・なぜ落語家が探偵なのか
- ・表紙の絵

↓

↓

結論：謎自体も重要やけどそれ以上に「私」の成長を見守る小説なんや！（°Д°）